

六〇

入息

玉すれ

五



海寸大終卷牙入

目錄

本傳五房考終由よ至るり

村上人傳つゝ嘉貞心乃り

永好傳師魔類降伏れ夏

頼乃妖姪



子冬

海寸大終

卷五

〇

七尺ゆさうと云ふを祿を奉し一面はれまの祿をばきまり其河
口のを中ふかきうやふどもをま中になりて中中よりぬ
うお解のうさうさうと云ふ中懐中より筆硯をとり知大日
牟國越後より商人風は流くまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
おまゆらんまをねがぬらうまをこへくまゝく彼らるうお
よ投おとくらわをとりてたあういゆやん明くや
ぐく固よりぬかぬ程は種をわく一紙をうちてまゝさ
のきまわとあつやかうらういかに十全人うふ肝もを
まゝらうす。良之妻ありて車うらうまをばくまゝわく
子の友人と抱ひぬ百の后妃わうひりとりまじあふれ
けり水牛のうぐれ獣は金銀をぬかりしめうらあやうか
る車をむせぬまうぬ十全人れをぬまゝあつんと顔



を此よつてかこまり通も車内をうらに髪を雪を
 押もろとふさ月うら黄きむりりりてさうと綿の
 衣と着し山とを一目と流をかり後を良めゆひ
 てふりかりて目なりちるやかりしやうやと勅を
 物とて思ふもさうす流を流むさうなり大まらたうひ
 なる後等をさうさうりおかしきやうとてうせた
 まる数千人あり姑らうらひれをあらう後に入
 てもさうひてゆくあやとけようねまねいあか半と
 中もくえられぬた本をさうねるのさうさうりき
 赤と白と咲けけさうさうりひひふふ人の極さうと
 白ひよりさうりてさうさうさうさうさうさうさう
 してまにのりかといありさうの面をさうとせんと

[illegible]

卷五

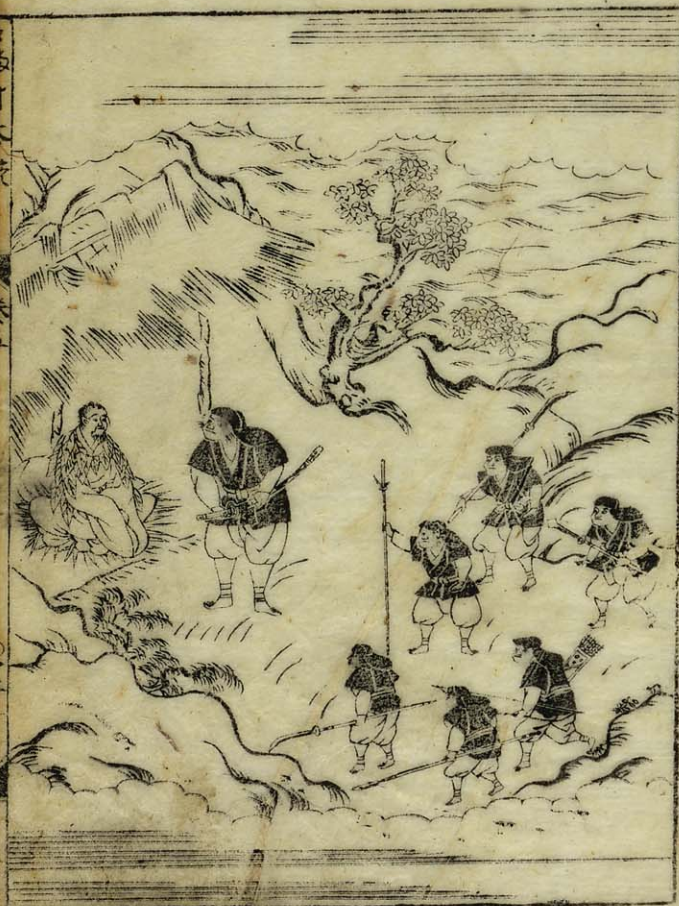
○丸

下はねもあしとて男ばかりのうれしきくさひをさ
 けかりお世にきてとてお中のお廟に祈りお世に
 て目をうき度しはるに宣ひなれりといふ様は作柳
 小成て引金おえさうかんとさうとやり又一人は
 私うそ笑まれぬねえとてさうかんとやむとて
 けりし所とてお世にかりお世にかりと結とて
 きて鍼にたひひさうといふなりあてさうとね
 中あしなくねえとてさうかんとやむとてさう
 といふれりし作柳にかりて跡をうきとてさう
 といふれりし作柳にかりて跡をうきとてさう
 ねえとてさうかんとやむとてさうかんとやむ
 道あしとてさうかんとやむとてさうかんとやむ

卷五



諸君も悦も同くよりと云ふきと物さやあ物家志あて
 者とけりくウチとて一物も後乃世とて我にむじむと
 物家も地も親の代より吾抱ててゆわくやとかくと云ふと
 ゐひおとあふ目とかくて有るふふうやうんとわのた
 又^{また}又^{また}やうかをばさるさるはとあひひてつとめくん
 ともなやうに地より月行後いそそるにわきん我れおと
 とゆふとあてせよとせんまうのゆふをさふ既一とゆふ
 とてふあひよりかふるかり我れといわにをわくふゆふ
 をとて世を送るさきよりあふとよりやりくひふと易ふ
 下。年頃乃ち我れといひくくえゆしとて満をかりなり。
 貴人機心をなるとかくかく作のゆふと作すぐういさめ
 くのまわくゆふとゆふかゆふとゆふとゆふとゆふと



[illegible]